

報告①

鞠智城に残る渡来系技術

講演者紹介

長谷部 善一（はせべ よしかず）

熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館館長。

専門は日本考古学（古墳時代）。学芸員。

平成三年四月に熊本県教育庁に入庁。文化課、装飾古墳館、

手県教育委員会（併任）等を経て、令和四年四月より現職。

岩

鞠智城に残る渡来系技術

歴史公園鞠智城・温故創生館 館長 長谷部 善一

本日は鞠智城シンポジウムにお越しいただきありがとうございます。

先ほどまでのところ君とくまモンのステージが盛りを見せており、これはちょっとしやべりにくいのではないかと思っておりましたけれども、頑張っていきたいと思いますのでどうぞよろしくお願ひいたします。

一 はじめに

まずは、五年ぶりの東京での開催になりますので、このシンポジウムについて御紹介します。

このシンポジウムは、鞠智城跡の史跡指定を記念して平成十六年五月に熊本県鹿本郡菊鹿町（当時）で第一回目を開催しました。その後、平成二十一年（二〇〇九年）七月から、鞠智城研究を深めることを目的に、国内の歴史学研究の一大拠点である東京で「鞠智城」をキーワードとして、日本古代史並びに朝鮮古代史など各分野の研究者の方々と鞠智城跡の歴史的意義と課題を考えてきました。その中で、全国に向けた鞠智城の知名度向上にも取り組んできました。



その後、東京での開催はもとより大阪、京都、福岡などの都市圏でもシンポジウムを開催し、これまで通算十六回のシンポジウムを重ねてきました。

本年度は第十七回となり、平成三十年（二〇一八年）十月以来、五年振りとなる東京での開催で、「渡来系技術と古代山城・鞠智城」とテーマを掲げています。そして、昨年度のテーマ「渡来系技術から見た古代山城・鞠智城」をさらに深掘りするため、サブタイトルに「渡来文化の重層性」を付しています。

昨年度、登壇いただいた吉村武彦先生（明治大学名誉教授）から、「渡来系の技術の再評価が必要」との指摘があり、「在来系か渡来系かという二分法の議論以前に、渡来系とは何かを見直す議論が必要」との提言をいただきましたので、今年度はここに絞つて議論を深めたいと思います。

報告が終わった後には、佐藤信先生（くまもと文学歴史館館長・東京大学名誉教授）のコーディネーターのもと、本日登壇いただいた講師の方々とディスカッションを行い、鞠智城に残る渡来系技術について理解を深めてまいります。

二 鞠智城に残る渡来系技術

それでは、鞠智城に残る渡来系技術とは何か、というところで話を進めてまいります。『日本書紀』には「長門国に城を築かせ、筑紫国に大野城と基肄城を築かせる」という記述が出てまいります。六六三年の白村江の戦いで唐・新羅連合軍に敗れた倭國のヤマト政権は、唐・新羅の侵攻を恐れ対馬の金田城を始め、亡命百濟官人の築城指導のもと大野城・基肄城などの古代山城を築きます。

大野城・基肄城と同時期に築かれたとする鞠智城では、これまで熊本県による発掘調査で、渡来系技術について多くの事例が示されています。ここからは鞠智城に残る渡来系技術について説明をします。

（一）選地（図1）

私が鞠智城に残る渡来系技術の一つとして最初に考えるのは「選地」です。なぜこの地が古代山城の築城場所として選ばれたのかを考えていきます。

今、お示ししたところが鞠智城になります。鞠智城は、古代「遠の朝廷」と呼ばれていた大宰府から直線距離で六十二キロメートル南に離れています。このことから様々な説が出されていますが、大宰府との関係からみると、唐・新羅による国内への侵攻があつた際、主戦場となる大宰府やその周辺に展開する大野城・基肄城へ武器や食料等を供給する兵站基地としての役割を担つっていた城と考えられます。

鞠智城は、古代から大国であつた肥後国的一大穀倉地帯である菊鹿盆地やその南に広がる熊本平野を

一望する位置に位置しています。また、西海道や大分方面への支線となる官道の存在、さらにそこから派生している車路等、鞠智城は交通の要所にもあたるため古代山城としての存在意義があつたのではないでしょうか。

次に、鞠智城内に入り、さらに詳しく立地を見て いきます。これまでの発掘調査で建物群が多く確認されるる米原・長者山地区を中心に、大きく「コの字形」に谷が城を囲んでいます。さらに南側と西側において版築土塁が廻り、今知られている鞠智城の姿が復元されて います。

私たちは日頃から通勤や移動などで鞠智城を菊池市や山鹿市方面から眺めるのですが、未だに鞠智城がこの丘陵の中でどこにあるのが分かりません。よく、鞠智城においてになる方々からも「鞠智城の場所がどこか分から ない」と指摘をいただいていることころです。

私は、この外から確認しづらいところに鞠智城の特徴



図 1

があると思います。鞠智城は城内に入り、多くの遺構が確認されている米原地区に立って初めて、城と言う認識に立つことができます。後で亀田先生が紹介なさると思いますが、岡山県総社市の史跡鬼城山のように、外から見てはっきりと城とわかるような城・地形ではあります。鞠智城の場合は、もしかするとわざと外から見えてないようを作られているのではないかと私は考えております。

(二) 土壘・城門 (図2)

それでは次に、西側土壘について説明します。現在は細い尾根状の地形になつております。そこでは、これまでの発掘調査で「版築」技術を用いた土壘が確認されています。

版築 そもそも版築の技術は、もともと国内にあつた技術ではありません。版築技術の始まりは中国の都城を構



図2



図3

成する城壁を作る技術として成立し、その後、朝鮮半島を経由して国内に持ち込まれたものと考えられています。その技術が鞠智城の土壘にもちいられており、発掘調査によって確認されています。

それでは次に、鞠智城の城門を含む城全体について考えます。当時、古代山城を築き始めるまでは国内には城という思想そのものがなかったのではないかと考えています。考古学的に見ても、縄文時代、弥生時代の集落以上の面積を防衛だけの目的で土壘・城門で囲う構造物は知られていません。「城を構える」これ 자체が渡来系の思想、技術と言つて良いと考えます。(図3)

次に、鞠智城の城門について説明します。これは池の尾門跡です。城内で確認されている三つの門のうちの一つです。ここでは城門に取りつく石壘が確認されており、城門と併せて外部からの侵入を防ぐ施設があつたことが発掘調査により確認されています。

(三) 貯水池跡

続いて、鞠智城に残る渡来系の思想、渡来系技術のもと作られたのが貯水池です。貯水池を作る技術は、古墳の周濠や古代東アジアに起源をもち、補強土工法を採用した狭山池（大阪府）など農業用水のための貯水池などの事例があります。

古代山城のうち国内で知られている貯水池の事例は、現在のところ鞠智城だけです。近年、鞠智城の貯水池研究の一環で、韓国の古代山城に残る集水施設との比較研究に関する論文が出され、城内での飲料水の確保とともに、祭祀に関する遺構との見解も示されています。

銅造菩薩立像 貯水池跡の発掘調査において「銅造菩薩立像」が出土しています。当時、国内には仏教が伝来していたとはいえ、古代山城で仏像が出土するというのは、国内で初めての事例です。この仏像についても、近年、美術史学の方面からの研究もなされ、山城の祭祀に関する



図4

る遺物であることや、百濟系渡来人の念持仏であつた可能性が改めて示されています。(図4)

(四) その他の渡来系技術

石垣 次に、鞠智城に残る渡来系技術として「石垣」があります。古代山城における石積みは、渡来系技術者が築城指導をしたと確認される大野城（福岡県太宰府市ほか）、基肄城（佐賀県基山町ほか）などで谷部を閉塞する箇所や水門周辺に使用された技術です。鞠智城では、まだ本格的な調査は実施していませんが、他の古代山城と類似する石積みが確認されています。

八角形建物 鞠智城で最も渡来系の思想を示しているとし、渡来系技術を示す遺構として「八角形建物」があります。この遺構も国内の古代山城には事例がなく、韓国の「聖山城」などで多角形建物の事例があることから建築の思想・技術の源流を朝鮮半島に求めることができます。

瓦 出土遺物の観点からは、先ほど「銅造菩薩立像」に言及しましたが、その他に單弁八葉蓮華文の「軒丸瓦」があります。瓦の文様や製作技術には、朝鮮半島との関係を理解する上で重要なヒントが残されています。鞠智城跡出土の軒丸瓦は、これまで百濟系と整理されてきました。しかし、本日この後、報告なさる亀田修一先生の近年の研究で、鞠智城出土の軒丸瓦の文様や瓦当の上半分に丸瓦を被せる製作技法等から新羅系の瓦との見解も示されています。(図5)

鞠智城の礎石建物「礎石」 が語る渡来系技術

- 日本列島において大型花崗岩の利用は古墳時代の石棺製作に始まる。熊本県内では史跡永安寺東古墳、史跡大坊古墳（玉名市）にその使用例が見られます。
- 国内で花崗岩類の加工が再び活発となるのは飛鳥時代（6世紀末）寺院造営技術の一環として取り入れられ、**飛鳥寺造営に際し百濟の技術的影響**があったと推測されています。
- 花崗岩類の使用は寺院や飛鳥地域における宮殿建築において主流となり律令国家の形成が進んだことにより、国家が主導する宗教的・政治的施設の造営を通じて増加したと考えられています。
- 鞠智城においてもその延長上で、国家が主導する政治的施設の造営のとして花崗岩類を利用した礎石建物群が建設されたと考えます。

参考文献「日韓古代国家成立期における石工技術の比較研究」

廣瀬覚・高田祐一



36号礎石建物

図 5

（五）花崗岩加工技術

最後になりますが、最近、私が注目しているのが、鞠智城の礎石建物に使用されている礎石の石材です。

鞠智城では、礎石建物が八世紀第1四半期後半～八世紀第3四半期（鞠智城Ⅲ期）に作られ始めます。この時期、

鞠智城は、築城当初の城としての構えから、最低限城としての体面を保つつも、米の備蓄のための施設へと変化を始めた時期に当たります。この時期の代表的な礎石建物として四十九号建物があります。この時期、他の礎石建物より規模が大きく桁行九間（二十一・六メートル）、梁行三間（七・二メートル）の総柱建物があります。この建物では本来は四十基の礎石があるはずですが、現存する石材は二十九基で、うち二十八基に花崗岩の石材が使われています。一基のみに安山岩が使用されています。すべての石材が残っているわけではありませんが、およよその使用石材の傾向はこれから読み取れると考えています。

鞠智城を地質学的に見ると、南側土墨南端付近から池の尾門跡を経て西側土墨以西にかけ花崗岩を産出する地域になります。この地域以外の土地は、阿蘇に起源をもつ溶結凝灰岩が台地を形成しており、深迫門跡、堀切門跡付近には凝灰岩崖を観察することができます。しかし、池の尾門跡付近の小河川流路内では、花崗岩が碎け流れ出た砂鉄の沈殿層が見られるなど、地質の違いを見ることができます。

日本列島における大型の石材利用や花崗岩の利用は、古墳時代の石棺製作というところから始まります。熊本県では玉名市にあります永安寺東古墳えいあんじひがしや大坊古墳だいぼう（玉名市）で、横穴式石室の天井石、楣石など重量が掛る石材にのみ花崗岩が使用されています。

花崗岩が国内で本格的に使用されるのは、飛鳥時代の寺院建築の一環で取り入れられ、飛鳥寺（奈良県明日香村）の造営に際し、百濟の技術者が関与したことが文献に残されています。その後、花崗岩の加工技術を駆使し、基壇を造り礎石を花崗岩で作るという行為が飛鳥時代に寺院建築や都城建設において主流となり、その後の律令国家の形成とともに普及が進んだとされています。

鞠智城においてもその延長線上で、東アジアの緊張に応じた政治的判断により、国家が直接関与し築城された礎石建物への改築に際し、花崗岩が積極的に利用されたものと考えています。

鞠智城周辺における阿蘇起源の溶結凝灰岩や安山岩の存在については先に述べました。加工しやすいという面ではこれらの石材に勝るものはありません。しかし、ヤマト政権が政治的目的で築造する建物群には既に都で利用され、それも格式の高い石材とされる花崗岩を積極的に利用することは十分にあり

得ると考えます。

まだ研究の途上ですが、鞠智城のⅢ期（八世紀第1四半期～八世紀第3四半期）に掘立柱建物柱から礎石建物へと改築が始まりますが、当初は礎石建物群の礎石の大半は花崗岩を多く利用します。しかし、時期を経てⅣ・Ⅴ期（八世紀第4四半期～九世紀第3四半期・九世紀第4四半期～十世紀第3四半期）となるに従い、鞠智城周辺では採集の難しい石材である安山岩、礎石に利用できるような硬質の凝灰岩の利用率が高くなる傾向があるようです。この石材の利用の傾向から見ると、Ⅲ期を境に律令国家の直接的な関与から、地方が監理・運用する施設へと変化していた可能性も指摘できると思います。

Ⅳ期以降、建物群の新築、修理等の管理が国から地方に移管されたことを受け、管理する立場に立つた地方勢力は生活の基盤となる地域で産出する日頃から利用し慣れ親しんだ石材を鞠智城内に持ち込み、礎石建物の礎石として利用したのではないでしようか。

後世、近世城郭を築く際に石垣築造の際に、工事を担当した範囲の石垣石材表面に印をつけた痕跡が今も確認されます。それが古代山城鞠智城では礎石石材の違いに現れたものではないでしようか。

それでは、私からの鞠智城に残る渡来技術ということについては、これで終わらせていただきます。